



ドビュッシー：ヴァイオリン・ソナタ

ドビュッシーは最晩年に様々な楽器のための6つのソナタを計画したが、それらは結局、3曲しか完成しなかった。本曲は死の前年、1917年の作で、ドビュッシーにとって生涯最後の作品となった。第一次世界大戦の最中、荒廃した世相と迫りくる自らの死に対峙しつつも、そこから解き放たれるように自由な旋律が紡がれていく。ふと香るスペインの調べが辞世の歌に気高さを添える。

「第1楽章：Allegro vivo」はおもに3つの部分からなるが、冒頭でピアノに導かれて始まるヴァイオリンの旋律は情熱的でありながら、どこか憂いを帯びている。「気まぐれで軽快に」と記された「第2楽章：Intermezzo」は、夢想的で軽やかな雰囲気の中に進む。「第3楽章：Finale」は、ヴァイオリンの速いパッセージが連続し、即興演奏のような自由さを見せつつ、終結部へと熱量を増していき、曲を閉じる。

ドビュッシー：チェロ・ソナタ

本作は「6つのソナタ」の第1曲として1915年に書かれた。演奏時間は10分前後の短い曲だが、洗練された楽想を有している。

フランス・バロック風の荘厳なピアノで始まる「第1楽章：プロローグ」は、自由な幻想曲風のスタイル。チェロが力強く情熱的な旋律とメランコリックなメロディを交互に奏でる。ピチカート多用し、ギターをかき鳴らすような「第2楽章：セレナード」では、気まぐれで皮肉めいた、幻想的かつ不気味な旋律が響く。第2楽章から休みなく続く「第3楽章：フィナーレ」は、躍動感にあふれた楽章。スペイン風の音階や複雑なリズムが織り交ぜられ、めまぐるしく表情を変化させながら、華やかに全曲を締めくくる。

ドビュッシー：ピアノ三重奏曲

本作は1880年、ドビュッシーが18歳で作曲した初期の作品。チャイコフスキーのパトロンとして知られるフォン・メック夫人の邸宅に滞在していた折に、彼女が雇っていた三重奏団のために書かれた。後年の印象主義的なスタイルではなく、フランス・ロマン派の影響を感じさせる、甘美で親しみやすい旋律を聴くことができる。

「第1楽章：Andantino con moto allegro」は、優雅で叙情的な主題が特徴的なソナタ形式。「第2楽章：Scherzo - Intermezzo. Moderato con allegro」は、ピチカートを効果的に用いた、軽快で遊び心のあるスケルツォ。「第3楽章：Andante espressivo」は、美しく静謐で、情緒豊かな緩徐楽章。「第4楽章：Finale. Appassionato」は、情熱的な推進力を持ち、最後は輝かしいト長調で結ばれる。

ショーンソン：ピアノ三重奏曲

ショーンソンのピアノ三重奏曲は、フランス近代室内楽の傑作の一つ。師であるセザール・フランク譲りの「循環形式」を用いた、4楽章構成を採用している。深い憂愁と情熱が交錯するドラマチックな響きの特徴とし、特に第3楽章では、美しい旋律を聴くことができる。

「第1楽章：Pas trop lent - Animé（あまり遅くなく、活気をもって）」は、重厚で内省的な序奏に続き、情熱的でダイナミックなソナタ形式の本編へと展開する。「第2楽章：Vite（速く）」は、軽快でリズムカルなスケルツォ風の楽章で、エスプリと遊び心が感じられる。「第3楽章：Assez lent（十分にゆっくりと）」は、ショーンソン特有の深い憂愁を湛えた緩徐楽章で、全楽章の中で最も感情的に深く、美しい旋律が印象的。「第4楽章：Animé（活気をもって）」は、循環形式によりこれまでの楽章の主題が回想され、最後はト短調のまま力強くドラマチックに幕を閉じる。